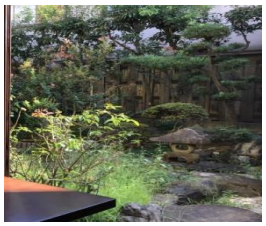
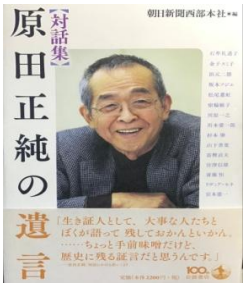
第 19 回「やまだ塾」

2 ヶ月ぶりに「やまだ塾」を八尾の美しい庭が見える部屋で行った。日差しは強いが、庭には秋の気配も感じられた。いつもながら庭を眺めていると、なんだか心が和んでくる。



塾のまえ、メンバーがギターを弾きながら歌を披露してくれた。「のさり」という新曲で、彼が作詞、作曲したものだ。よく通る声で、こころに響く歌であった。「のさり」とは、天草に古くから伝わることばで、「天からの授かりもの」という。水俣の漁師で、水俣の「語り部」として活躍した杉本栄子さんについても紹介した。

帰宅してから、『対話集　原田正純の遺言』岩波書店、2013 年を手にとった。杉本さんの長男、肇さんとの「対話」が掲載されているからだ。原田正純先生が亡くなって 10 年になるが、朝日新聞西部本社版に連載された貴重な肉声の記録を一冊にまとめた本だ。



「原点は一次訴訟ですよ。あなたのおかあさんの栄子さんとか、最初の 29 家族、112 人。貧乏のどん底でね」肇さんは母から語り部の活動を継ぐ。「語り部をやっているうちに、大切なことがだんだん見えてきた。それは、生活は苦しかったけれども、家族と過ごした時間にもいい面があったし、病気に苦しんでいたけれども大切にしてくれた父親とか母親とか、一生懸命つくってくれたおにぎりとか、非常に心に残っているんです。これから未来に向けて、子どもたちに何を残してあげたいか、というと、自分が体験したことかな、と思っているんです。」

塾では、まず私から『おおさかの住民と自治』に寄稿した「大阪 IR カジノ 住民監査請求から住民訴訟へ」を紹介した。9 月 30 日には東京に大阪から多くの人が出かけ、国土交通省などに働きかけをした。国に IR カジノ計画を認可させない運動とともに、地元大阪での住民訴訟の意義などについて語った。討論では維新政治に話題が集中し、来春の地方選挙、とりわけ大阪市長選・市議選の重要性を確認した。次に、メンバーから要望のあった宮本憲一・山田明編『公共性を考える 1 公共事業と現代資本主義』垣内出版、1982 年の「はじめに」をコピーして紹介した。「本書は、従来の社会資本充実政策を解明し、批判することを通じて、これまでの『公共性』を批判し、それにかわる『共同性』あるいは真の『公共性』を明らかにし、それにもとずく、こんごの『社会的共同資本』のあり方をあきらかにすることを目的として構成されたものである。」

なぜ、若輩の私が宮本先生と並んで編者になったのかについても説明した。「日本の共同研究は、相互の義務感がとぼしいので、完成までに長年月を要する欠陥がある」と宮本先生は指摘している。

（2022 年 10 月 2 日）